

FORUM

Vol.13

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース

「フォーラム」

第 13 号

CONTENTS

巻頭言 2

大阪府立大学理事（教務・学生担当）
学生センター長 寺迫 正廣

コラム 3

単位制度と質保証

副学生センター長 高橋 哲也

FDセミナー(第1回・第2回)報告 4

教育の質保証とIR 6

キャリアサポート室から府大の教育に求めるもの 7

—— 教育の中のキャリア支援 ——

学務課キャリアサポート室長 桜井 大二郎

編集後記 8



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

府大生は内向きか？ ～ 留学がもたらすもの～

大阪府立大学理事（教務・学生担当）
学生センター長 寺迫 正廣

日本メディアは昨今、「日本人学生は内向き」と言い募り、外国で学ぶ学生数が減少していることを大きく報じている。府大ではどうだろうか。事情は多少異なるように思う。交換留学生などの資格で海外を目指す学生数は漸増傾向にあり、半年あるいは一年（以上）アジアやヨーロッパに留学している。折りに触れて留学意向をたずねると、必要を感じないと答える学生もいるが、女子学生を中心に是非留学したい、条件が整えば行きたいという声が多く聞かれる。留学は何をもたらすのか、海外で学んでいる学生たちの声を通して考えてみたい。

最初は工学研究科修士課程のAさん。かれはEISTI（フランス）で2年間勉強し、修士号を取得した（昨秋帰国して、今は府大の修士論文を準備中。受理されればダブルディグリー取得第1号となる）。「思えばこの2年間は<しんどかった>の一言に尽きます。新しい言語を勉強しつつ専門教育を受けることの難しさを痛感しました。でも、留学してよかったです。なんとか必要単位を修得し、修士号という確かなものを得て自信がつけました。友人が多くできたことも大きい。友だちがいなければ修了できなかったでしょう。かれらはぼくの宝です。4月には就職しますが、ヨーロッパやアフリカで働きたい。かれらと情報交換しながら、日本語、英語そしてフランス語を使って仕事ができればと考えています。」

次はロータリー奨学生として昨秋からローザンヌ大学（スイス）に留学している人間社会学研究科修士課程のBさん。ヨーロッパ美術史が専門で、今は「中世美術史」と「近代美術史」2コマずつ、「美術理論」を1コマ受講しているという。図像を見ながらの授業とはいえ、言語のハンディは大きいはずだが、Aさんとは趣が異なる。「専門の授業では、先生方は論文調の言い回しや単語を頻繁に使われるので、事前にそれらの用語に通じていなければ授業についていけなかったと思う（私の専門ではキリスト教用語が多い）。また、ローザンヌ大はフランス語系に加え、ロマンス語系やドイツ語系も多いので、私もドイツ語を勉強し始めた。一方、学生寮の友だちには英語しか話さない人もいたので英語にも力を入れている。」奨学生に決まってから出発まで1年半の準備期間があったとはいえ、こんな風に事もなげに言う。BさんはAさんとは違った意味で留学と勉強を心から楽しんでいる。得るものも大きいと期待できる。

府大HPの「国際交流」欄には他にも留学生たちのレポートが載っているが、いずれも外国で学んで成長している様子が分かる。むしろ留学がすべてではないだろう。しかし、異文化のなかで多様な人々と交流し、必死に勉強すれば、学知を深めるとともに人間的にも大きく成長することがわかる。Aさんは言う「どうかぼくに続く学生が出てほしい。」府大生よ、海外に飛び出そう！

久しぶりにFORUMにコラムを書くことになり、何を書こうかと迷いましたが、質保証という観点から単位制度を考えてみることにしました。

ご存じのように大学の「単位」というのは、「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とす

単位制度と 質保証

る内容をもつて構成することを標準」(大学設置基準第21条2)としています。これが、実質的な意味を果たしていないということを問題にしたいのではなく、単位というのは、時間による「量的評価」であり、「質」に関して何ら保証するものではないということです。日本の大学の卒業は、必要単位数を集めることで認められますから、日本の大学の卒業資格が何ら質保証を与えていないというのは、制度設計上から当然のことです。したがって、質保証するためには、単位制とは異なる制度が必要になります。単位制度を導入したアメリカの大学では、学修の量ではなく質保証のために、GPAを用いています。大阪府立大学では、2005年度からGPAを導入していますが、卒業とGPAは関係ありません。卒業生の質保証のためには、単なる単位数だけでなく、GPAをこれに何らかの形で加味することを検討する必要があると思いま

す。もちろん、GPAのもとになる各科目の成績評価のあり方や単位数の考え方、GPAをインセンティブとして活用する方法など議論することは多々あるので、学内のさまざまな場所で議論を深めていきましょう。

GPA以外の質保証のあり方としては、卒業時の試験が考えられます。イギリスの場合は、卒業時の試験の成績により、3つの学位のレベルが分けられ、これが就職等にも大きく影響します。学術会議での分野別質保証の議論も進んでおり、こちらの方向に進む可能性もありますが、この場合でも大学(学部・学科)が学士課程において学生が身につけるべき能力を明確にし、その達成度を測る仕組みを作るという難題について議論していく必要があります。

なお、大学設置基準には、単位制の例外規定として「前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。」(第21条3、下線筆者)とあり、卒研だけは学修の成果を評価することになっています。日本の「卒研」は世界的にも評価されており(逆に、卒研以外の教育課程は全く評価されていない)この部分を質保証にどう活かすかという議論も必要でしょう。

大阪府立大学の卒業生の質保証について、みんなで一緒に考えませんか。

REPORT

FDセミナー (第1回・第2回)

報告

「カリキュラム策定のための勉強会」(FDセミナー) 報告

ご存知のように、大阪府立大学は、平成24年度からのスタートを目指して学士課程教育の改革を進めている最中です。そこで今回、例年開催しているFDセミナーを兼ねて、大学改革推進本部との共催で「カリキュラム策定のための勉強会」を2回開催いたしました。

第1回

初年次少人数ゼミナール — 学士課程教育における初年次少人数ゼミナール —



第1回の勉強会(6月21日)は、本学でも導入が決まっている初年次少人数ゼミナールをテーマに、東北大学高等教育開発推進センターの羽田貴史先生をお招きして開催いたしました。初年次少人数ゼミナールは、多くの研究型大学で既に実施され、大学で望まれる主体的・自律的学習へと学生を導く上で、大きな効果を上げています。羽田先生には、日本においてこのようなゼミナール

が広まってきた歴史的背景を踏まえつつ、初年次少人数ゼミナールの意義と、実施する際の様々な留意点についてお話いただきました。初年次少人数ゼミナールは、教員のスキルが必要とされる一方で、これを教員にとっての教育力形成の場とすることができると、またそのためには環境面を含めた教員をサポートする体制が重要であることなど、今後、本学で実施していく上で、示唆に富んだ貴重なお話を聴くことができました。

羽田貴史先生から下記の書籍を寄贈いただきました。

センターにて貸出ししておりますので、ご覧ください。

- ・ 大学における初年次教育と「学びの転換」(2007/3/30)
- ・ 大学における「学びの転換」とは何か(2008/3/28)
- ・ 大学における学生相談・ハラスメント相談・キャリア支援(2008/3/28)
- ・ 大学における「学びの転換」と言語・思考・表現(2009/3/30)
- ・ 大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来(2010/3/25)

- ・ 学生による授業評価の現在 (2010/3/25)
- ・ 東北大学のFD実施状況と展望 (2007/3)
- ・ 平成21年度IDE大学セミナー「現代学生の発達課題と学習・生活支援」
(2009/11/16)
- ・ 第3回東北大学基礎ゼミFD・ワークショップ-報告書- (2010/2)
(東北大学高等教育開発推進センター発行)

第2回

キャリア教育 ― 正課教育で学生のキャリアをどう関連づけ、育てるか ―



第2回(9月1日)は、キャリア教育をテーマに、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一先生をお招きして開催いたしました。キャリア教育は、大学設置基準の改正に伴い、平成23年4月より学士課程の中に位置づけて実施することが求められています。社会や学生の変化を背景として変遷してきた日本のキャリア教育の中で、今求められているキャリア教育とは何か、それをどのような形で実施していくべきかについて、他大学の事例もまじえつつ、溝上先生にお話しいただきました。また、近年、学生は大学入学以前にも多様なキャリア教育を受けてきている一方、それが大学生活中の活動に必ずしも結びついていない現状に対して、溝上先生は、学生が日常と将来とを結びつけて考え行動できるよう、1年生や2年生といった早い段階でキャリア教育を行っていく必要性を説かれました。

溝上慎一先生の本勉強会で紹介された調査結果の詳細は、下記に掲載されています。

- ・ 京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催
「大学生のキャリア意識調査」
http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/research/top_2008.html
- ・ 『大学生の学び・入門ー大学での勉強は役に立つ!』(有斐閣アルマ, 2006)
溝上慎一著

本勉強会を収録した動画を、高等教育開発センターのwebページ
http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/seminar/seminar_2010.html
にて、公開中(学内限定)です。是非、ご覧ください。

(星野)

教育の質保証とIR

ここでは、本学と同志社大学、北海道大学、甲南大学の4大学が連携して取り組む「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出－国公立4大学IRネットワーク」（平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」採択取組）についてご紹介します。

1. 教育の質保証が求められる背景

少子化、高等教育のユニバーサル化、国際化にともない、大学がこれまでにないグローバル規模の競争にさらされていることは申し上げるまでもありません。加えて、国・地方財政状況の逼迫から、社会に対して税金を投入されることへの説明責任が強く求められています。このような社会的な流れのなかで、平成23年度より学校教育法施行規則が改正され、大学は公的な教育機関として、社会に対し、教育情報を公表することが法令により義務化されることにもなりました。今日、教育の質保証という大きな課題が個々の大学に問われています。

2. IRとは

各大学はこれまでも、GPA制度やCAP制、シラバスなどを導入し、単位制度の実質化を図るための取組を進めてきましたが、今後はさらに、これらの制度の効果を検証し、質保証へとつなげていく仕組みが求められてきます。そこで、最近注目されているのがIR(Institutional Research)という機能です。

IRとは、例えば「大学内の財務や教育研究活動に関する諸情報を、効果的に集約・管理・分析し、大学の意思決定や組織戦略に活用するための組織研究・実践活動をいう。」のように定義されますが、実際には大学の規模や、大学における位置づけによってその定義は異なってきます。具体的活動としては、エンロール・マネジメント（学生獲得と在学生管理）、大学評価／自己点検・評価、各種全国調査へのデータ提供などが挙げられますが、今回は、学生調査を軸とした客観的なデータに基づく教育の評価、改善に焦点を絞って、教育の質保証システムの構築を目指していきます。

3. 4大学連携の目指す相互評価

IR業務の基本的な流れは、データの収集、分析、提言、政策実行のサイクルに集約されますが[※]、今回の取組の特徴は、4大学が個々に保有する学生環境データ（入学関連データ、教務データ、就職データ等）と4大学が共通で実施する学生調査の結果とを統合して分析し、相互評価を行うことにあり、このような分析が可能となるIRシステムを現在開発しています。

4. IRシステムの効果

これらの取組によって、各大学では以下のような効果が期待できます。

◎ 教育の成果の測定

学生調査により、教育の効果が上がっているかどうかについて、定期的に学生からの意見聴取が可能となります。この調査から、学士課程教育を通してどのような能力が身に付いたかといった、総合的な自己評価の結果が得られ、これらの結果を成績等の客観的データと併せて分析することができます。また、IRシステムを活用すれば他大学との相互評価も可能となり、将来的に参加校が増えることで、同じカテゴリーの他大学との比較も可能となります。

◎ 教育内容及び方法、質向上及び改善への活用

この調査では、学習時間をはじめ授業時間内外の学習状況についても詳しく質問しています。単位の実質化、シラバスの活用、適切な学習指導法等の工夫について、その評価への活用が期待できます。

5. 最後に

IRシステムを活用することで、調査・分析は可能となりますが、これらのデータを教育の質の向上・改善に役立て、カリキュラム編成の方針に反映させるためには、各大学のトップがその必要性を認識し、客観的なデータに基づく意思決定プロセスを構築することがもっとも重要であることを申し添えておきます。
(上垣)

※ 柳浦猛「アメリカの Institutional Research IR とは何か？」
『国立大学財務・経営センター研究報告』第11号、2009年、224-225頁

キャリアサポート室から府大の教育に求めるもの

— 教育の中のキャリア支援 —

学務課キャリアサポート室長
桜井 大二郎

学生は社会から守られ学びを保障されてきた「学び舎」から旅立つこととなりますが、そのギャップを少しでも埋めることが教育のひとつの目標とすれば、より円滑な旅立ちを支援するのがキャリアサポート室の使命と言えます。

平成22年1月中教審の報告にありますように、「大学教育や学生生活の経験を通じて獲得する成果には、専門分野に関する知識、技能とともに、社会的、職業的自立に必要な資質能力が本来的に内在している」と言われていますが、現実にはそういった能力が不十分なまま卒業する学生が少なくなく、就職環境の悪化とあいまって、キャリア教育導入の流れになっていることは周知のとおりです。

この背景を踏まえてキャリアサポート室が本校の教育に求めたいことは、動機付けにもかかわる本格的な「キャリア教育」とは別に、各科目の履修において社会人基礎力の育成につながる手法を少しでも取り入れてみることです。例えば、課題解決型のPBL、グループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション等です。すなわちゼミや研究室で取り組まれているすでにお馴染みの要素を他の授業でも取り入れられないだろうかということです。

教員はファシリテーターの役割で学生を主役とし、発言度合いで他学生への影響度、貢献度を成績指標にしたり、科目の社会とのつながりを考える課題を出したり、民間企業人を招いてのディスカッション、専攻学部生の混在、高校生や他大学生、留学生を交えてのグループワークなどの社会的役割の違う人たちや同じ府大生でも文化的背景や専門性の違う学生との積極的交流を盛り込んだものなど、多様性を求めることも有効ではないでしょうか。まさに初年次ゼミでこのような手法が活躍するのではないかと期待しています。

また、身近に感じたことは、論外ながら授業中の食事や教室でのゴミ放置から進路の未報告など、常識であつたり組織から求められたことを周囲への無配慮や自分へのメリットの有無だけから無視されている現実が散見されることです。社会に出るとほとんどは企業など組織に入ることになります。規律、ルール遵守は必須であるが故に、それができないと致命的な評価につながりかねません。あまり気乗りしない注意喚起になりましたが、これも社会人としての必須事項を学生のうちに認識しておいたほうがいいとの思いから触れさせていただきました。

キャリア教育でモチベーションを高く持ち、取り組むものは何であれ充実した学生生活を送り、日々のゼミや研究、授業で知識と社会人基礎力も身につけている、これが学生にとって理想的な教育環境だろうと思います。キャリアサポート室は、その理想に少しでも近づくべく、就職支援やキャリア形成支援の立場から先生方と連携して貢献できるよう全力で取り組みますので、どうかご協力、ご支援いただけますよう、よろしくお願いいたします。

編集後記

今回は、IRに関する本学の取り組みとキャリアサポート室の活動について、それぞれ職員に記事の執筆をお願いしました。お忙しいなか、原稿依頼を引き受けて頂きましたことについて、この場を借りて、御礼申し上げます。なお、今後とも、FD活動に関係する業務に就かれている職員の皆さんには執筆をお願いしていきたいと思えます。

巻頭言では、「府大生は内向きか？」という原稿を頂きました。最近のマスコミでもよく取り上げられているテーマでもあります。これを機会に、現代の学生気質が本当に「内向き」なのか、制度的問題なのか、等々議論が深まることを期待いたします。(高根)

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成23年2月28日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
総合教育研究機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中央区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉 大木 理 上垣 友香理 兼田 博 木田 真生 小島 篤博 高根 雅啓(副主任) 高橋 哲也 谷口 栄一 田畑 稔
車 美愛 塚本 民雄 星野 聡孝(主任) 松室 光 水鳥 能伸 廣島 はるみ・藤澤 圭子(事務担当)

この冊子は1500冊作成し、1冊あたり48円です。